

第31回

函館港イルミネーション映画祭 2025

第29回シナリオ大賞

函館市長賞[グランプリ]

箱館ハイカラクロッキー

今井 美香



**【作者プロフィール】**

今井 美香（いまい みか）

1968年愛知県生まれ。神奈川県茅ヶ崎市在住。シナリオ・センターにて脚本家・小説家の柏田道夫氏に師事。名古屋市長催シヨートストーリーなごや佳作受賞。北野生涯教育振興会・論文・エッセー佳作受賞。

【人物表】

- 神崎悠乃（ゆの）（16）女学生
 （91）無職
- 木暮伸（22）市電車掌
- 松原和歌子（21）カフェー女給
- 黒川光之助（32）洋画塾講師
- 神崎靖朋（40）呉服商／悠乃の父
- 神崎ふみ（35）悠乃の母
- 栗原絹代（16）女学生
- 野中とき（13）奉公女中
- 高杉あかり（48）ラジオパーソナリテイ
- 木暮茉莉（31）会社員

画塾生A／画塾生B／使用人／職員

【あらすじ】

ラジオパーソナリテイの高杉あかり（48）は番組内で、祖母・悠乃から聞いた函館市電・ハイカラ號にまつわる想い出を語る。

ハイカラ號が函館に来た大正七年に神崎悠乃（16）は女学生。悠乃は古風な父と考えが合わず、内緒で洋画塾に通っていた。市電の絵を描くようになった悠乃は、車掌の木暮伸一（22）、カフェーの女給・松原和歌子（21）と親睦を深め、木暮に淡い恋心を抱く。

画塾に通っていたことがばれた悠乃は、親の決めた相手と結婚するよう命じられる。家業の神崎呉服店が百貨店進出の影響で経営難に陥り、悠乃の結婚しか打開策がなかった。

悠乃は木暮と和歌子が愛し合っていると知り失恋。悠乃は奉公女中の野中とき（13）の言葉で人生は自分で決めると決意する。

木暮と和歌子は誤解からすれ違い、和歌子は田舎に帰るという。悠乃は画塾の講師・黒川にいるんな生き方がある上で、親の決めた相手に嫁ぐことを選ぶと語る。

悠乃は最後の絵として、市電の前に佇む木暮と和歌子の絵を描き上げた。悠乃はその絵を木暮に渡し、和歌子を追いかけるよう懇願。悠乃は二度と絵筆を持つことなく、親の決めた相手

に嫁いだ。

平成五年、高校生だったあかりは九十を超えていた祖母・悠乃から、初恋の想い出と洋画を描いていたことを初めて聞く。悠乃はあかりと市電に乗り、車窓から木暮との想い出の景色を見ながら息を引き取る。

ラジオ番組が終わると木暮茉奈（31）があかりを訪ねる。茉奈が「曾祖父母の宝物」と見せた古い絵は悠乃が木暮に渡した絵だった。茉奈は木暮と和歌子の子孫だった。

あかりが祖母の想い出の市電に乗ると、目の前に女学生の悠乃と車掌の木暮の幻影が浮かぶのだった。

○ラジオ局・収録スタジオ内

複数人のスタッフがいるラジオの収録スタジオ。

ガラス越しのブース内でマイクを前にスタンバイしているパーソナリティーの高杉あかり(48)。

ラジオ番組のジングルが流れる。

ディレクターが合図をするとアイコンタクトしてマイクに向かって話し始めるあかり。

あかり「みなさま、今晚は。函館レディオウェブ、高杉あかりがお送りする『サタデイカーニバル』の時間です。今日はお便りの紹介から。函館市のラジオネーム・おしゃれで忍耐さん、いつもありがとうございます」

あかり、お便りを読む口調で、

あかり「あかり姉さん、今晚は。コロナ以降運行休止していた市電・函館ハイカラ號が遂に復活しましたね。あのレトロな車体が大好きなので、とても楽しみです。あかり姉さんは、ハイカラ號に乗ったことありますか」

○現代の函館・市街地

函館市街地の風景。

線路を走っている市電。

○ラジオ局・収録スタジオ内

収録ブース内で話すあかり。

あかり「ハイカラ號。私には忘れられない思い出があるんです。高校生の時かな。大正時代の車体を復元したハイカラ號が走って。当時九十過ぎてた祖母と一緒に乗りました。今日は、私の祖母とハイカラ號の話をさせてください」

○大正時代の函館・街並み

T・『大正七年』

商家が立ち並ぶ石畳の道。

行き交う馬車。

女学生らしい袴姿の神崎悠乃(16)が、颯爽と自転車で走り抜ける。

悠乃の髪トリボンが揺れている。

あかりM「大正七年だから、今から百年以上も前のお話です。

私の祖母、旧姓・神崎悠乃は十六才の女学生。函館の呉服店の娘として、何不自由なく育てられました」

○黒川洋画塾・玄関(朝)

『黒川洋画塾』と木の看板が掲げられた広い一軒家。

○同・アトリエ

十人くらいの画塾生たちが、キャンパスに絵筆を走らせ

ている。

悠乃と黒川光之助（32）が教壇で対峙している。

悠乃「この画塾に入門させてください」

黒川「帰りましたえ」

悠乃「なぜですか？入塾試験があるなら挑戦させてください」

黒川「女の塾生は前例がありません」

悠乃「力や身体を競うものならばともかく、体力で絵を描くわけではないでしょう」

黒川「絵画は体力です。何もわかっていないようですね」

悠乃、不満そうな表情。

画塾生たちが、悠乃をバカにしたようにはやし立てる。

画塾生A「ここは夢二を描くところじゃないよ。帰った帰った」
他の画塾生たち、笑っている。

悠乃、堂々として、

悠乃「女学生が皆、一様に夢二が好きだと思わないで頂きますか。第一、夢二はもう流行りがすぎております」

黒川、威圧的に悠乃を見ながら、

黒川「君は？夢二が古いのであれば、誰の影響を受けていますか？」

悠乃「ゴッホ、ゴーギャン、ルノワール」

画塾生たち、こそこそ話している。

画塾生A「ゴホン？なんだって」

画塾生B「知らないよ」

黒川、驚いて悠乃を見て、

黒川「良いでしょう。デッサンの試験を認めます」

悠乃「ありがとうございます」

悠乃、黒川に深く頭を下げる。

○女学校・校門前（朝）

女学校の名前が書かれた門柱。

女学生たちが校内に入って行く。

自転車で校門へと入っていく悠乃。

○同・教室

教室内には悠乃、栗原絹代（16）を含む女学生たちが授業を受けている。

絹代が前、悠乃が後ろで窓際の前後の席。

教師は歩きながら教科書を朗読している。

悠乃は教科書も開かず、帳面に絵を描いている。

教師、悠乃の様子に気づき、朗読を中断して、

教師「神崎さん」

悠乃、驚いて手を止める。

教師「立ちなさい」

悠乃、立ち上がり、

悠乃「は、はい」

教師「続きを読んでもください」

悠乃、慌てて、

悠乃「えっと」

絹代、自分の教科書を開いて、悠乃に教えようとしている。

悠乃が慌てて教科書を開く拍子に帳面が見えてしまう。

教師、悠乃の帳面を取り上げる。

知的そうな美しい女性を描いたスケッチ。

教師、その絵を見て、

教師「これは誰ですか？」

悠乃「……先生です」

教師、明らかに気を良くして、

教師「ま、まあ、いいでしょう。今回は大目に見ます。次からは授業に集中するように」

悠乃「はい。申し訳ございません」

悠乃、深く頭を下げる。

教師が背を向けると、悠乃と絹代、アイコンタクトをする。

絹代「ねえ、悠乃ちゃん」

悠乃「なあに？」

絹代「さっき、悠乃ちゃんが描いてた絵ってほんとに先生を描いたの？」

悠乃「そうだよ」

絹代「先生より、すごく美人だったよね」

悠乃「描くなら美しく描く方がいいでしょ。綺麗な絵を描きたいし、誰も傷つかない」

絹代「でもお見合い写真で素敵って思ったのに……会ったら違ったら嫌だな」

悠乃「……えっ？絹ちゃん、お見合いするの？」

絹代「卒業までに決めるなら、今から探さなきゃ。来週、お見合いなの。銀行の御曹司と……」

悠乃「えーっ、すぐじゃない」

絹代「悠乃ちゃんは？」

悠乃「……考えたこともない」
刻を知らせる鐘が鳴る。

悠乃と絹代、弁当箱を片付け始める。

○同・中庭

芝生に座り、弁当を食べている悠乃と絹代。

○神崎呉服店・外観（夕）

老舗らしい風格が漂う呉服店の店先。

『神崎呉服店』という看板がある。

悠乃が自転車で帰ってくる。
自転車から降りて、店内に入る悠乃。

○同・店内(夕)

高級な着物や反物が飾られている店内。

記帳台で算盤を弾いている神崎靖朋(40)。

奥の畳間で縫い物をしている神崎ふみ(35)。

扉を開いて悠乃が入ってくる。

悠乃「ただいま帰りました」

履き物を脱いで、奥の畳間を通り過ぎようとする悠乃。

神崎、算盤の手を止めて、

神崎「悠乃、待ちなさい」

悠乃、足を止めて神崎に向き直る。

神崎、慥然として、

神崎「その頭は何だ」

悠乃「リボンをご存じないんですか」

手を止めて、心配そうに会話を聞いているふみ。

神崎、ため息をついて、

神崎「多少は若い娘の流行もあると目をつぶっていたが、西洋にかぶれるのもいい加減にしなさい」

悠乃「お父さまはどうして西洋の文化を毛嫌いするのですか？」

神崎、語気を荒げて、

神崎「うちは伝統ある呉服屋だ。洋装ばかりになったら死活間題だ」

悠乃「函館は西洋文化の窓口なのに。時代に取り残されたら、

そちらの方が死活問題でしょう」

神崎「まったく……女のくせにへらず口ばかりで。女学校も休

みがちだそうじゃないか。一体どこに行っているんだ。まさ

か、男でもいるんじゃないだろうな」

悠乃「そんな人おりません。お父さまの邪推です」

神崎「じゃあ、なぜ女学校に行かないのだ」

悠乃「……毎日毎日、お裁縫や家事の心得。良き妻、良き母と

は何でしょう、というお話ばかり。興味が持てないのです」

神崎「それを学ぶために女学校で行かせているのではないか」

悠乃「算術や英語なら、もっと学びたいんですけど」

神崎「少々跳ねっ返りなのは仕方がない。だが、女学校に行か

ないのはダメだ。わかつたな」

神崎、障子をビシヤリと閉めて奥の部屋に去る。

悠乃、不満そうな表情。

黙って聞いていたふみの前に座り、話し出す悠乃。

悠乃「お母さまもわかつてくださらないのですね。本当にお父さまが正しいのでしょうか」

ふみ「悠乃の気持ちも察してあげたいけれど、毎日、美味しいものを食べて、女学校で学べるのに、悠乃は何が不満なので

しょう」

野中とき(13)が入ってくる。

とき「失礼いたします」

とき、雑巾がけを始める。

ふみ、悠乃に、

ふみ「ときは十の頃から、うちに奉公に来て居るのですよ。悠乃、あなたは自分が恵まれている自覚がないのですか」

とき、遠慮がちに、

とき「いえ、私は旦那さまと奥さまに良くして頂いて恵まれております。弟や妹の奉公先はもつと厳しくて。ほんに感謝しております」

とき、掃除を終えて部屋を出て行く。

悠乃「ときは賢い子ですね」

ふみ「ええ、お父さまの仕事を見ながら、誰に教わるでもなく読み書き算盤を覚えてしまいました」

悠乃「ときの生い立ちは大変だと思えますが……」

ふみ「ときだけではありませんよ」

悠乃「……お母さまのご実家が貧しくて、幼い頃から苦勞されたことは聞いています」

ふみ「今もお腹いっぱい食べられない子供たちが、たくさんいるのですよ。悠乃が恵まれているのは誰のおかげですか？」

悠乃「……お父さまのおかげです」

開いた障子の隙間から、沈む夕陽が見える。

○女学校・校門前(朝)

女学校の名前が書かれた門柱。

登校する女学生たちが、校内に入って行く。

悠乃と絹代は、それぞれの自転車で乗りながら並んでやってくる。

突然、自転車を止める悠乃。

絹代、悠乃に驚いた様子で自転車を止める。

絹代「悠乃ちゃん、どうしたの？遅刻しちゃうよ」

悠乃「絹ちゃん、ごめん。やっぱり休む」

悠乃、学校と反対方向へと自転車で引き返して行く。

絹代、自転車で去る悠乃を見ながら、

絹代「悠乃ちゃん、もうおじさんから言われているのにー」

○黒川洋画塾・玄関(朝)

自転車で行ってくる悠乃。

あかりM「祖母はデッサンの試験に無事合格し、黒川洋画塾に入門することができました。ところが祖母は女学校をサボり、誰にも内緒で画塾へ通っていました。当時、女性が絵画を志すことは歓迎されなかったそうです」

画材らしき風呂敷包を持って、中に入っていく悠乃。

○同・アトリエ

悠乃を含む画塾生たちが、キャンパスに絵筆を走らせている。

黒川が画塾生たちの様子を見ながら、室内を歩き、時折止まって指導する。

黒川、画塾生Aの絵を見ながら、
黒川「なかなか良いですね。この背景の煉瓦に陰影をつけるとさらによい」

画塾生A「はい。ありがとうございます」

刻を知らせるチャイムが鳴る。

黒川「今日はここまで」

悠乃と画塾生たちは立ち上がり、
画塾生全員「ありがとうございます」

画塾生たちは、キャンパスや絵の具を片付け始める。

悠乃、納得が行かない様子で、退室しようとする黒川を呼び止める。

悠乃「黒川先生、待ってください」

黒川「何か？」

悠乃「私の絵にだけ一度も指導をいただけません。なぜでしょうか」

黒川、悠乃の描いた絵の前に来て、凝視している。

緊張する悠乃。

沈黙の後、黒川が口を開く。

黒川「なぜこれを描いたのですか？」

悠乃「なぜって……」

黒川「何のために？描く意味は？」

悠乃「私にだけ講評頂けないのは、女子だからでしょうか」

黒川「君自身の想いがこの絵の中に全く見えません。有名な洋画の亜流ではない」

悠乃「それは……」

言葉に詰まる悠乃。

黒川「表現したい想いもなく、女子ということにとらわれているうちはこの道は向かないからやめた方がいいですね」

部屋を出ていく黒川。

悔しそうな表情の悠乃。

○函館・市街地

人々で賑わう函館の市街地。

市電の停留所で待っている悠乃。

接近メロディが鳴り、市電が近づく。

ハイカラな珍しいデザイン市の市電を食い入るように見る悠乃。

市電が停車し、悠乃を含む人々が乗り込む。

○市電の車内

車内に座る悠乃。

車掌の木暮伸一（22）がマイクでアナウンスする。

木暮「発車します。次は松風町」

車内メロデイが流れ、市電が走り出す。

木暮、マイクを置いて車内を歩く。

悠乃が木暮に声をかける。

悠乃「あの……車掌さん」

木暮、優しい笑顔で、

木暮「はい。どうかしましたか？」

悠乃「いえ、あのこの市電って珍しいですね。レンガ色で、まるで洋館みたい」

○走る市電

レンガ色のハイカラなデザインの市電が走っている。

木暮の声「ハイカラでしょう。千葉の鉄道会社から来たばかりで、この列車一つしかないんですよ」

悠乃の声「たった一つ？今乗ってるこの列車だけですか」

○市電の車内

座席に座っている悠乃と木暮が話している。

木暮「はい。今のところはこの列車だけですよ」

悠乃、涙ぐむ。

木暮、悠乃を心配するように、

木暮「どうかしましたか？大丈夫ですか？」

悠乃「……私、落ち込むことがあったんですけど、ちょうど乗れて運が良かったみたいです」

木暮「はい。とても幸運ですよ」

悠乃「この市電を絵に描きたいなって、思わず乗っちゃったんですけど」

木暮「絵って……市電を絵に描いてくれるんですか？」

悠乃「はい。まだスケッチし始めたばかりですけど……」

木暮「市電の絵なんて見たことない。描いてもらえたら嬉しいですよ」

悠乃「ありがとうございます。ただ……今、気づきました」

きよんとしている木暮。

悠乃、いたずらっぽく笑って、

悠乃「市電に乗っちゃうと、車体は見えないんですね」

木暮「いつも乗ってるから気づきませんでしたか……確かにそうですね」

笑い合う悠乃と木暮。

○函館・市街地

市電が走っている。

ハイカラなデザインではなく、通常のシンプルな市電。クロッキープックに鉛筆を走らせ、市電をスケッチしている悠乃。

あかりM「祖母は翌日から、毎日街角で市電をスケッチするようになってきました。さまざまな市電が通り過ぎてても、あのハイカラなレンガ色の市電にはなかなか出会えなかつたそうです」

疲れた様子で手を止める悠乃。

市電の接近メロディが鳴る。

ハイカラなデザインの市電が近づく。

悠乃、市電を見つけて元気を取り戻した様子で、悠乃「やっと会えた」

悠乃、走って市電を追いかけると、素早く鉛筆を走らせらる。

紙片にハイカラな市電のスケッチが描き込まれていく。

夢中で周りが見えていない悠乃は、通行人とぶつかってしまう。

通行人「何やってんだ。危ないな」

悠乃「すみません」

悠乃が頭を下げている瞬間、風でスケッチが飛ばされてしまう。

悠乃、走ってスケッチを追いかけますが、線路を走る市電

に阻まれて進めない。

空高く飛ばされるスケッチを悲しそうに眺める悠乃。市電の汽笛が遠ざかり、小さくなっていく。

○黒川洋画塾・アトリエ

悠乃と画塾生たちが絵を描いている。

市電の絵を描いている悠乃。

悠乃に声をかける黒川。

黒川「なぜ市電の絵を描くのですか？」

悠乃、生き生きとした表情で、

悠乃「市電は……一つ一つ顔が違います。それぞれの表情をとらえて描きたいと思いました」

黒川、うなずきながら、

黒川「いいですね。その調子で」

画塾生たちが、悠乃の絵の前に集まる。

画塾生A「市電の絵いいね」

画塾生B「前の絵よりずっといいよ。気負いがなくてさ」

悠乃、笑顔になり、

悠乃「あ、ありがとうございます」

親しく笑い合う悠乃と画塾生たち。

○市電の車内

車内に座っている悠乃。

木暮が悠乃に気づいて声をかける。

木暮「こんにちは」

悠乃、木暮の顔を見て、

悠乃「あ……あの時の車掌さん」

木暮、優しい笑顔で、

木暮「あなたを探していました」

悠乃「車掌さんが私を？」

木暮「どこかで話せますか？」

悠乃「は、はい」

木暮「いい店があります」

悠乃、少し不安そうな表情。

○カフェーせしりあ・外観

レンガ造りの趣きある洋風店舗。

『カフェーせしりあ』という看板。

若い女性やカップルが出入りしている。

○同・店内

ほぼ満席で賑わっている店内。

悠乃と木暮は向かい合って座り、談笑している。

悠乃「……ここがカフェー」

木暮「カフェーは初めてですか？」

悠乃「はい。ずっと懂れておりました」

木暮「もしかして……女学校でカフェーの出入りは禁止されて

ますか？すみません、気づかなくて。すぐにでもみましょうか」

悠乃、笑顔で、

悠乃「一度来たかったから、嬉しいです」

エプロン姿の女給・松原和歌子（21）が悠乃たちのテ-

ブルに来る。

和歌子「いらっしゃいませ。木暮さん、いつもありがとうございます

います」

木暮「和歌子さん、今日は可愛らしいお客さん連れてきたよ。

僕は珈琲。えっと……」

木暮、悠乃に向けて、

木暮「何がいいですか？好きなものを頼んでくださいね」

悠乃「え……あの、どうしよう」

和歌子、悠乃に優しく声をかけて、

和歌子「ソーダ水はどうでしょうか。若い女性に人気ですよ」

木暮「あいすくりんも頼みましょうか」

悠乃「は、はい。それをお願いします」

和歌子、テーブルを離れる。

木暮、悠乃に一枚の絵を差し出す。

悠乃が描いて飛ばされたハイカラな市電の絵。

悠乃「これ……私が描いた」

木暮「この絵を交通局に届けてくれた人がいたんですよ。ハイカラな市電の絵を描きたいって言ってたから、あなたかと思っただけです」

絵を手取る悠乃。

悠乃「もう戻って来ないって諦めてました。ありがとうございます、ごまします」

木暮「よかった。素敵なお絵だから。交通局でも評判になったんですよ」

悠乃「私の絵が？嬉しいですよ」

和歌子がソーダ水とアイスクリームを運んでくる。

和歌子「お待たせしました」

悠乃の前に、キラキラ光る硝子の器に乗せられたアイスクリンが置かれる。
エメラルド色に透き通るソーダ水の炭酸が弾ける。

じつと眺めながら見惚れている悠乃。

悠乃「これがソーダ水とあいすくりん……きれいな」

木暮「初めてですか？」

悠乃「はい。父が西洋文化を嫌っていて、洋食をたしなんだことないんです」

和歌子「存分に味わってくださいね」

悠乃、下がるうとする和歌子に声をかける。

悠乃「その前掛け……素敵ですね。学校の割烹着と全然違う」

和歌子「ありがとうございます」

木暮「和歌子さんはお洒落だね。前掛けも彼女が考えて、カフェの制服に採用されたんですよ」

和歌子、照れながら、

和歌子「もう、木暮さん。褒めすぎです」

和歌子、テーブルを離れる。

木暮が包みを悠乃に差し出す。

悠乃、驚いた様子で、

悠乃「これは？」

木暮「開けてみてください」

悠乃が包みを開けると、新品の写生帳。

悠乃「これは……」

木暮「写生帳です。また描いた絵をなくしちゃうといけないから……帳面の方が安心かと思って」

悠乃「写生帳……画塾でも持っている人は少なく、東京から取り寄せないと手に入らないと聞きました」

木暮「よかった。交通局に出入りしている方が取り扱っていたんです。役立ててもらえたら……」

悠乃「頂けません。こんな希少なものを」

木暮「気に入らませんでしたか」

悠乃、写生帳にそっと手をかざして、

大正時代の札幌の百貨店・外観写真。

悠乃「いえ……自分の写生帳なんて夢みたいで……」
木暮「でしたら受け取ってください」

悠乃「……本当にいいんでしょうか。申し訳なくて」

木暮「それでは市電を描いたら時々見せてください」

悠乃「はい、それはもちろん」

木暮「僕たちが大切に思っている市電の絵を描いてもらえるなんて、交通局の仲間たちもみんな喜んでるんですよ」

悠乃、写生帳を受け取って、

悠乃「ありがとうございます」

○交通局・事務室

出入り自由な様子の事務室。

悠乃と木暮を交通局の職員たちが取り囲んでいる。

悠乃が写生帳を見せている。

描かれた市電の絵を皆で見ながら、楽しそうに盛り上がっている。

あかりM「祖母の初恋の人は市電の車掌さん。それは私が小さい頃からずっと聞いてました。祖母は写生帳……今で言うクッキーブックをプレゼントしてくれた車掌の木暮さんに淡い恋心を抱くようになりました」

○モノクロの記録写真

○百貨店・店内

帽子、文房具、懐中時計など、紳士物が陳列されている
ショーケース。

袴姿の悠乃と絹代が不慣れた様子で見ている。

女性の店員も多い。

悠乃、テキパキと働く女性店員たちを見ている。

悠乃「札幌には職業婦人たくさんいるのね」

絹代「悠乃ちゃん、よそ見ばかりして。木暮さんへのお礼の品を探しに来たんでしょう」

悠乃「お母さまはいいところに嫁がなかつたら幸せになれないっておっしゃるけど、職業婦人の方々、素敵じゃない？」

絹代「職業婦人で成功する人なんて一握りでしょ。悠乃ちゃん、まさか木暮さんのこと本気なの？」

悠乃「本気って……そんなのわかんない」

絹代「お嫁に行くまでの想い出づくりなら反対しないけど……」

絹代、陳列商品の山高帽を手を取って、

絹代「これ素敵。これにしたら？」

悠乃「制服しか見たことないし……洋装するのかわからない」
絹代「情報少なすぎるのよ。無難にきな粉餅とかにしたら？」

悠乃「そんなのただのお礼としか思わないでしょ。お礼って口
実でなんとなく好意を伝えたいの」

絹代「悠乃ちゃん、難しいこと言うのね」

絹代、シヨーケース内の懐中時計を指して、

絹代「お仕事柄、時間は気にされそうだけど高そう」

悠乃「どれくらいするのかね」

絹代「高価な贈り物は、想いを確かめ合ってからの方がいいと
思うわ。やっぱり今はきな粉餅で……」

悠乃、店員を探すように辺りを見回す。

隣接した呉服売り場が目に入る。

たくさん華やかな着物、反物が陳列され、客たちは自
由に見たり、身体にあてて吟味している。

悠乃「百貨店が増えたら、呉服屋はどうなっちゃうんだろう」

悠乃と絹代の前に店員がやってくる。

店員「何かお探でしょうか」

悠乃と絹代、驚いて緊張の面持ち。

○広場

植栽や花壇のある広場。

木の長椅子に腰掛けている悠乃と木暮。

木暮が箱を開けると、筆記具が入っている。

悠乃「写生帳のお礼です」

木暮「ありがとうございます。何だか……気を使わせてしまい
ましたね」

悠乃「ご迷惑でしたか？」

木暮「とんでもない。うれしいです。ありがとうございます」

木暮、大切そうに箱を鞆にしまう。

木暮「そうだ。悠乃さん、カフェーの絵も描きたいとおっしゃっ
てましたよね」

悠乃「はい。店内はスケッチできるんですけど、女給さんたち
はお給仕で動いているからなかなか描けなくて」

木暮「和歌子さんに話したら、モデルになつてくれるそうです
よ」

悠乃「ほんとですか？和歌子さんなら美しいから素敵な作品に
なりそう」

広場ではしゃぐ子供たちと、微笑ましく見守る母親。

温かい目で見ている木暮。

悠乃「あの木暮さんは……どうして市電の車掌さんになったん
ですか？」

木暮「……うーん、説明が難しいですね」

悠乃「ご、ごめんなさい。出過ぎたことを聞いてしまつて」

木暮、慌てて、

木暮「そんなことありませんよ」

広場の横を市電が通り過ぎる。

木暮「流行病で親も兄弟も亡くして……田舎で仕事もないから、あてもなく出てきたんです」

悠乃、木暮の話を真剣に聞いている。

木暮「たまたまこの街に降りて、市電に乗ったら、一瞬だけ故郷の山が見える場所があったんです。市電って街中の足だから、ほんとに一瞬なんですけど」

悠乃「奇跡ですね」

木暮「故郷の山を毎日見られるならって、車掌の募集広告を見てください。寮にも入れることになって、市電のおかげで僕は生き延びてるんです」

悠乃「木暮さんの故郷の山……私も見てみたいです」

○走る市電の車内（夕）

車内の乗客は少ない。

悠乃が座席に座っている。

車掌として乗務している木暮。

車窓から山々が見える。

山の頂に夕陽が沈む美しい情景。

木暮、悠乃にアイコンタクトをする。

悠乃、木暮にうなずいて、名残惜しそうに車窓を眺めている。

○和歌子の部屋

簡素だが綺麗に片付いた室内。

洋服や装飾品、鏡台のある女性らしい部屋。

悠乃が私服姿の和歌子をモデルにデッサンしている。

悠乃「和歌子さん、少し下を向いてもらってよろしいでしょうか？」

和歌子、うつむく。

うなじが美しい。

和歌子「これでいいかしら」

悠乃「はい。素敵です」

和歌子、ふと心配そうに、

和歌子「私なんかモデルでいいの？女学校のお友達の方が……」

悠乃「カフェーを描きたいですし、女給さんの中でも和歌子さんがいいです。私、人物画を本格的に描いたことなくて、無理言っちゃってごめんなさい」

悠乃、鉛筆を置いて、写生帳を和歌子に見せる。

悠乃「まだ途中でですけど、輪郭は描けました」

和歌子、写生帳を覗き込む。

描かれているのはカフェーの制服の前掛け姿の和歌子。和歌子「素敵。なんだか私じゃないみたい。実物より綺麗ね」

悠乃「いえいえ、モデルには及びませんよー」

悠乃と和歌子、笑い合う。

和歌子「この絵……私、前掛けしてるのね。今は私服なのに」
悠乃「はい。和歌子さんのカフェーでのお姿を描きたくて。それに前掛け素敵だったから……」

和歌子「言ってくれたら、前掛けしたのに」

悠乃「とんでもない。モデルになっていただけでうれし
いです」

和歌子「悠乃ちゃん、カフェーでも前掛けを褒めてくれたもの
ね」

和歌子、立ち上がって筆筒から前掛けを出し、悠乃に差し出す。

和歌子「つけてみて」

鏡台の鏡に映る悠乃、身体に前掛けをあてる。

悠乃の背後で和歌子が前掛けの紐を結ぶ。

悠乃によく似合っている。

鏡を覗き込み、夢心地の悠乃。

○女学校・中庭

芝生に腰掛け、弁当を食べている悠乃と絹代。

悠乃「お見合いどんな人だったの？」

絹代「いかにも銀行重役の御曹司」

悠乃「良さそうじゃない」

絹代「いくら資産家でも家業手伝うのは大変だから、そこはい
いんだけど」

悠乃「何が不満なの？」

絹代「条件は申し分ないんだけど……」

絹代、小声で悠乃に耳打ちして、

絹代「お姿が……好みではないの」

悠乃「絹ちゃん、殿方は顔ではなくて資産って言うたのに」

絹代「限度があるのよ。向かい合って食事も辛いし、あの人と
夜にとか……考えられないの」

悠乃「夜って？」

絹代、食事の箸を止めて、

絹代「ねえ、悠乃ちゃん。やや子ってどうしてできるか知って
る……よね？」

悠乃、きょんととして、

悠乃「殿方に嫁いで口づけをしたらできるのでしょう」

絹代、吹き出す。

悠乃「違うかしら。お母さまにそう教わったのに」

絹代「ごめんなさい。悠乃ちゃんにはまだ早いから。気にしな
いで」

悠乃、首をひねって考えている。

○神崎呉服店・奥座敷

店頭から奥まった畳の間で、神崎とふみが深刻に話している。

神崎「しかし、ときに言い寄っておるのは、豊原の息子だろう。

街一番の名士だから、露骨に邪険にするわけにも……」

ふみ「そうは言っても、ときから相談があつた以上、我々が見て見ぬふりをして、ときが襲われでもしたら……」

神崎「襲われるとは外聞の悪い」

ふみ「噂になれば……神崎呉服店の名誉に差し障ります。うちには奥さま方の信用で持っているのですよ」

神崎「大袈裟な。そうならなつたで、ときにも悪い話ではないではないか。豊原家ならたとえ妾でも……」

ふみ「妾になれるとは限りませんよ。一夜限りで捨てられるとしか思えませんわ」

神崎「ときが子を成せば、さすがに捨てるわけにはいかないであらう」

障子が開いて、悠乃が入ってくる。

驚いて口をつぐむ神崎とふみ。

神崎「悠乃」

ふみ「今の話、聞いておりましたか」

悠乃、混乱している様子で、

悠乃「どういうことですか？ときがお妾って……？」

ふみ、悠乃の言葉を遮って、

ふみ「とにかく、ときの年季が明けるまでは間違いないようにしましう」

神崎「……ふみがそこまで言うのであれば」

ふみ「年季が明けたら、釣り合いの取れた嫁ぎ先か、賢い子ですから相応の勤め先を考えてやってもよいし」

神崎「確かにそれが……神崎呉服店の名誉も守られるな」

ふみ、悠乃に向き直り、

ふみ「悠乃、あなたが悩むようなことではありません。今のお話は忘れなさい」

悠乃、怪訝な表情。

○同・庭先

手入れされた日本庭園。

ときが水まきをしている。

悠乃がやってきて、ときに話しかける。

悠乃「とき」

とき、悠乃に振り返り、

とき「お嬢さま。学校はいいんでしょうか」

悠乃「いいの」

とき「旦那さまに見つからないようにしてくださいね」

悠乃「もう遅い。見つかつてるから」

悠乃ととき、笑い合う。

悠乃「ときはいくつになったのかしら」

とき「十三でございます」

悠乃「大人っぽいね。うちに来た時から子供らしくなかったけれど」

とき「弟が二人と妹が三人います。まだまだ増えると思いますし、子供ぶつてる暇がないのです」

悠乃「ときは……殿方に懸想されているのですってね」

とき「懸想……ではないでしょう。私を手籠めにしたいただけ」

悠乃「手籠め……ってどういうことなの？嫁いでないのにお子ができるとか。何がなんだか」

とき「お嬢さま、ご存じないのですね」

悠乃「絹ちゃんにも変なこと聞かれたわ。やや子がどうやってできるかって」

とき、細長い枝を拾って地面に何か描いている。

とき、妖艶な笑みを浮かべて、

とき「お嬢さま、ご覧ください。お教えします。やや子がどうしてできるか」

悠乃、地面に描いた絵を覗き込む。

とき、悠乃に耳打ちする。

悠乃「えっ」

悠乃、衝撃を受けている。

○カフェーせりあ・店内

空いている店内。

女給たちもゆったり過ごしている。

悠乃が座っている。

テーブルの上にはソーダ水。

和歌子が悠乃のテーブル横にいる。

悠乃、和歌子に写生帳を見せる。

カフェー店内に和歌子がいる下絵。

和歌子「素敵」

悠乃「油絵で描こうと思ってるんです」

和歌子「完成したら見せてね」

悠乃「和歌子さん……あの」

和歌子「どうしたの？」

悠乃、恥ずかしそうに、

悠乃「……やっぱりいいです」

和歌子「悠乃ちゃんの話なら真剣に聞くから……安心して話してみてもいいよ」

悠乃「笑わないでね……私、結婚したら殿方とすることを最近

知って……」

和歌子「まあ」

悠乃「それって……いくら好きな人でも、嫁いだ人でも怖くないですか」

和歌子、優しく悠乃の手を握り、

和歌子「そうね……よく知らない人だと怖いけど、好きになつた殿方なら自然なことじゃないかしら」

悠乃「そう……思えるのかな」

同僚の女給たち、和歌子と悠乃の会話を聞いて、眉をひそめて陰口のような耳打ち。

○市電の停留所

会話しながら、市電が来るのを待っている悠乃と絹代。

市電が近づいて停車。

車内に乗り込む悠乃と絹代。

○市電・車内

車掌として乗務している木暮。

乗り込んで来た悠乃と目が合う。

木暮、悠乃に声をかける。

木暮「お久しぶりです。最近、絵を見せにきてくれませんか」

悠乃、木暮に会釈だけして座席に座り、顔を逸らしている。

悠乃の様子に不可解な表情の木暮。

停留所で市電が止まる。

悠乃は走って降りてしまう。

絹代、驚いて、

絹代「悠乃ちゃん、どこに行くの？」

市電は走り出す。

絹代、困った表情。

木暮に声をかける。

絹代「あの……木暮さんですか？」

木暮「はい。悠乃さんのお友達でしょうか」

絹代「そうです。悠乃ちゃんのことと相談に乗ってください」

木暮「もちろんです。僕でよければ」

絹代、満面の笑顔。

○市電車庫

様々な車体の市電が停車している屋外の車庫。

もう走っていない様子の市電も何台か保存されている。

木暮に連れられた悠乃がやってくる。

悠乃、辺りの市電を見回して、

悠乃「ここは？」

木暮「市電の車庫です。走っていない時はここに停車してるんですよ」

悠乃、うれしそうに、

悠乃「ここなら思う存分、市電の絵が描けます。動いてると細部はスケッチしづらくて」

木暮「よかったです。許可は取っているので、好きなだけ描いてくださいね」

悠乃、線路の上にはない保存車両を見つける。

保存車両を指して、

悠乃「あれは？」

木暮「もう走ってはいませんが保存している車両です。中に入れますよ」

○保存車両・内部

綺麗に手入れされている車両の内部。

悠乃と木暮が入ってくる。

向かい合って、離れた座席に座る悠乃と木暮。

悠乃、車窓を見ると何かに気づいた様子。

悠乃「木暮さん」

木暮「どうしました？」

悠乃、木暮を手招きして、

悠乃「こっち側に座ってください」

木暮、不思議そうに立ち上がる。

移動して悠乃の隣に座る木暮。

悠乃、向かい側の車窓を指して、

悠乃「ほら、見てください」

木暮、驚きの表情。

向かいの窓から、木暮の故郷の山が見える。

木暮「ここから……見えるんですね」

悠乃「見えますね」

木暮「初めて知りました。ありがとうございます」

悠乃、屈託なく笑って、

悠乃「大発見ですね」

木暮、悠乃を微笑ましく見ながら、

木暮「よかったです。悠乃さんが元気になって」

悠乃「私……元気なかったですか？」

木暮「絹代さんも心配してましたよ」

悠乃「絹代ちゃんたら。心配かけてごめんなさい」

木暮「一人で悩まないでくださいね」

悠乃、安心したように、

悠乃「もう大丈夫です」

木暮「え？」

悠乃「私、勝手にバカみたいでした」

悠乃、笑顔で、

悠乃「木暮さんは怖くないです」

木暮、戸惑いながら、

木暮「えっと……元気になったみたいですよ」

悠乃と木暮、微笑み合う。

○街路樹

並木道を自転車で通り過ぎる悠乃。
機嫌良さそうに鼻歌を歌っている。

○黒川洋画塾・アトリエ

キャンパスに絵筆を走らせている悠乃
と画塾生たち。

悠乃が描いている絵は、カフェーの店内で微笑む制服姿
の和歌子。

黒川はアトリエ前方の教壇にいる。

黒川「大事な発表があります」

悠乃と画塾生たち、手を止めて黒川に注目する。

黒川「東京の美術展覧会への推薦作を発表します」

ざわめく画塾生たち。

すぐに静まり、固唾を飲んで待つ悠乃と画塾生。

黒川「神崎悠乃くんの市電連作とカフェーの美女を推薦します」

画塾生たちが一斉に悠乃に注目。

悠乃、信じられないという表情で、

悠乃「え、私……ですか？」

黒川、悠乃の前に来て、

黒川「最初は洋画に向いてないかとも思いましたが、既存の真
似ではなく想いが伝わる素晴らしい作品を描くようになりま

した。皆が納得の推薦です」

画塾生たち、悠乃に向けて盛大な拍手と歓声。
悠乃「信じられない。ありがとうございます」

黒川と画塾生たちに頭を下げる悠乃。

○神崎呉服店・奥座敷

封書を前にして、無然としている神崎。
隣で不安そうな表情のふみ。

障子が開いて悠乃が入ってくる。

悠乃「ただいま帰りました」

神崎とふみの様子を見て驚く悠乃。

悠乃「お父さま、お母さま、どうしたのですか」

神崎、封書を座卓に叩きつけて、

悠乃「お父さま？」

神崎「これは何だ」

悠乃、封書から書面を出して目を通す。

悠乃「未成年の展覧会出展には保護者の同意が必要……そんな」

ふみ「保護者の同意の前に説明なさい」

神崎「黒川洋画塾って何だ」

悠乃「……黒川光之助という先生に、絵を学びに通っていま
した」

神崎、激昂して、

神崎「女学校にもロクに行かないで、そんなところに行つていいのよ」

悠乃「そんなところって……お父さま、聞いてください」

ふみ「嘘はいけません。習い事をたしなみたいなら、女学校を休んでココソソせずとも、どうして相談しなかったのでしょうか」

神崎「たしなみなら止めはせん。女だてらに展覧会出展とはどういうことだ」

悠乃「画塾で私の絵を推薦して頂けて……」

神崎「親の言うことをどこまでも無視して、どれだけ勝手にすれば気が済むんだ」

悠乃「お父さま、聞いてください」

神崎「もういい」

悠乃、ビクツと震える。

神崎、立ち上がって、

神崎「娘時代くらいは、と甘やかしすぎた。十七になったら女学校も辞めて私が決めた相手と結婚しなさい。悠乃、お前はそうでもしないと碌でもない道に落ちる。いいな」

障子をビシヤリと閉めて、部屋を出ていく神崎。

悠乃、ふみに訴える。

悠乃「お父さまとお母さまに黙っていたのは、私も反省しています」

ふみ、黙って悠乃を見ている。

悠乃「だからって知らない殿方と結婚だなんて。お父さまは横暴すぎます。お母さま、助けてください」

ふみ、優しい口調で、

ふみ「冷静に考えてみなさい。悪い話ではないでしょう」

悠乃「……お母さままで、そんなことをおっしゃるのですか？」

ふみ「悠乃、この函館にも洋品店があるのはあなたも知っていますでしょう」

悠乃「はい。金森洋物店さんは、女学校でも人気があります」

ふみ「そのうち人々の買い物は洋品店どころか、百貨店が主流になって呉服屋に来る人はいなくなりませう」

悠乃「……札幌の百貨店に行った時、まさにそう感じました」

ふみ「札幌の百貨店？あなたを連れて行ったことはございましたよ」

悠乃、しまったという表情。

ふみ、諦めたように、

ふみ「それなら話が早いでしょう。悠乃が思っているより、神崎呉服店はもう厳しい状況なのですよ」

悠乃「私が……家のために知らない殿方に嫁ぐのですか？」

ふみ「男子ですら絵の道は食べていけるとは限らない茨の道です。おなごの身で絵にこだわって嫁ぎもせず、どう生きていくのですか」

悠乃、言葉に詰まる。

ふみ「誰か想いを寄せる殿方がいらつしやるの?」

悠乃、ふみから目をそらす。

○悠乃のイメージ

市電の車内で二人きりの悠乃と木暮。

車窓から見える山の景色を眺めながら、顔を見合わせる

悠乃と木暮。

○神崎呉服店・奥座敷

うつむいている悠乃。

心配そうに悠乃を見ているふみ。

ふみ「……その方も悠乃を好いてくれているのですか?」

悠乃「……いえ、私の片恋です」

ふみ、ほっとしたように、

ふみ「私も嫁ぐ前に仲の良い殿方がおりましたよ。でもお父さ

まに嫁いでよかったです」

悠乃「私は……お母さまとは違います」

ふみ「……悠乃、大人になるのですよ。あなたの人生のためです」

悠乃「知らない殿方に嫁いで……好きでもないのに身を任せて、

それが私の人生なのです」

ふみ「悠乃は恵まれています。ときのように器量が良く賢くて

も、悠乃と同じ人生は選べないのですよ」

悠乃「いいえ。私はときがうらやましいです」

ふみ、悠乃の気迫に驚く。

悠乃、涙を流して、

悠乃「私の人生は……私が決めます。人生を後悔したくありません」

ふみ「先方は裕福な資産家で、悠乃を見かけて、大層気に入って来ています。必ず大切にしてくれますよ。悠乃にとつても幸せでしょう」

障子が開いて、神崎と続いてときが入ってくる。

神崎、強張った表情。

ふみ、神崎とときを見て驚く。

ふみ「何かあったのですか?」

神崎「豊原のご息が……正式にときを嫁に欲しいと。妾ではなく正妻として」

ふみ「ときはまだ十三ですよ」

神崎「今は婚約ということで正式な結婚はときが十五になるまで待つそうだ。それからときの年季までの支度金も、豊原家が払ってくれる」

ふみ、ときに寄り添って、

ふみ「ときはどう? こんないいお話……」

とき、大人びた微笑みで、

とき、大人びた微笑みで、

とき「もちろん、謹んでお受けいたします」

とき、悠乃に目配せをする。

悠乃、走って外に出て行く。

○函館・市街地

石畳を走って駆け抜ける悠乃。

泣いている。

悠乃の横をハイカラな市電が走っているが気づかない。

あかりM「祖母は家を飛び出し、木暮さんがいるはずのカフェー

へと向かいました」

○カフェーせしりあ・玄関

走ってくる悠乃。

木暮の姿が視界に入る。

悠乃「木暮さん、助けて……私」

一緒にいる和歌子に気づく悠乃。

悠乃、思わず物陰に身を隠す。

身を潜めて、木暮と和歌子の会話を聞いている悠乃。

和歌子「私は……あなたにふさわしい女ではありません」

木暮「そんな関係ない。僕には和歌子さんしかいない」

悠乃、ショックを受けた表情。

二人に気づかれないようにそっと立ち去る悠乃。

あかりM「いくら祖母が初心的な女学生でも察したと思います。

二人が愛の言葉を交わし、口づけを交わすのを見ないうちに、

祖母は全力で走り、カフェーから遠ざかろうとしました」

○函館・市街地

息を切らして、走る悠乃。

接近チャイムが鳴り、市電が停留所に停まる。

通常デザイン在市電。

悠乃は立ち止まり市電を見つめている。

○神崎呉服店・店内

記帳台で算盤をはじいている神崎。

数字を見ながら頭を抱えている。

縫い物をしているふみも表情が暗い。

使用人が焦った様子で入ってくる。

使用人「旦那さま、女将さん、大変です」

神崎「どうした。騒がしい」

使用人「大口の取引先が次々と取引停止したいと……」

神崎「何だって。一斉になのか」

使用人「はい」

神崎「一杜すつならともかく、おかしいではないか。何者かが

うちを陥れようとしているのか」

使用人、神崎の様子に怯えている。

ふみ、落ち着いた様子で、

ふみ「丸井今井が百貨店になる計画が進んでいます。安くて質のいい反物がたくさん手に入るそうですよ。百貨店との取引を視野に入れるなら今からということでしょう」

神崎「ふみ、人ごとのように言うでない」

ふみ「私、百貨店に勤めに出ようと思います」

神崎「何を馬鹿なことを言っておる」

ふみ「呉服の販売には慣れております。その辺の職業婦人に劣りませんわ」

神崎「そういう問題ではない。神崎呉服店の女将の誇りはないのか」

ふみ「誇りを食べて生きてはいけませんわ」

神崎「悠乃の縁談がまとまれば……」

ふみ「一時しのぐだけではなく、次の商売を仕込まないといけませんね。呉服はもう頭うちでしょう」

神崎「生意気を言うな。ふみ、お前段々悠乃に似てきておるぞ」

ふみ、小声で呟く。

ふみ「……それを言うのであれば逆でしょう」

神崎「何か言ったか」

ふみ「いえ、何も」

神崎、冷静でない様子で出て行く。

ふみ、呆れ顔で神崎の背中を見ている。

○同・奥座敷

神妙な面持ちの神崎、ふみの向かいに悠乃が正座している。

神崎「今までのような暮らしはできない」

悠乃、黙っている。

神崎「悠乃、お前自身の幸せのためでもあるのだぞ」

悠乃「私じゃなくて、お父さまの幸せでしょう。外聞、世間体」

神崎「何だと」

神崎が悠乃に手を上げようとするのをふみが止める。

ふみ「悠乃、あなたは苦勞を知りません。私ができるように育てたからです。何不自由なく」

悠乃、黙っている。

ふみ「私は貧しい幼少時代を過ごしました。少々のことは平気です。お父さまも代々継いだ神崎呉服店を守るために、あなたには見せない苦勞をしています」

悠乃「私だけ苦勞知らずだから、顔も知らない人に嫁いで苦勞しろと言うのですか」

悠乃、部屋を飛び出す。

神崎「悠乃、待ちなさい」

ふみ、神崎を制止する。

○交通局・事務室

木暮と同僚が談笑している。

悠乃が入ってくる。

木暮、悠乃に気づいて、

木暮「悠乃さん」

悠乃、泣き出してしまふ。

○広場

長椅子に腰掛けている悠乃と木暮。

悠乃「私、家族のために嫁いだ方がいいのでしょうか」

木暮、考えながら話し始める。

木暮「悠乃さんに幸せになつて欲しい前提になりますか……」

悠乃、木暮の言葉を待つている。

木暮「僕は家族を亡くしているから、どうしても家族を大切に

して欲しいと思います」

悠乃「私が嫁ぐことは何とも思わないのでしょうか」

木暮「いい人ならいいなと思いますよ。いい加減な男なら反対

です。悠乃さんを笑顔にしてくれる人でなくては……」

悠乃、立ち上がり、木暮に会釈して、

悠乃「ありがとうございます。お仕事の邪魔してすみませんで

した」

悠乃、木暮を振り返らず歩いて行く。

○橋の上

橋の上をふらふらと歩いている悠乃。

あかりM「和歌子さんとの逢瀬を見て望みが無いのはわかつて

いました。それでも一縷の望みに賭けたのです。木暮さんは

祖母が嫁ぐのを止めてくれるかもしれないと」

橋の欄干に寄りかかる悠乃。

橋の下には川が流れている。

悠乃、懐から写生帳を取り出す。

写生帳を川に捨てようとする悠乃。

やっぱり捨てられない。

ときが通りかかり、悠乃に気づく。

とき、慌てて悠乃の身体を抑え、

とき「お嬢さま、やめてください。早まらないでください。男

に振られたくらいで」

悠乃、驚いて、

悠乃「違うの。そうじゃないから」

悠乃ととき、揉み合つて二人で橋の上に転がつてしまふ。

× × ×

欄干にもたれて並んでいる悠乃ととき。

とき「お嬢さまはどうしたいんでしょうか」

悠乃「……どうつて」

とき「お嬢さまを袖にするような男と、大切に育ててくださっ

た旦那さまや女将さんとどちらが大事なのでしょうが」

悠乃「そういう言い方は卑怯よ。商売と私のどっちが大事、と同じ」

とき「お嬢さまが決めることですよ」

悠乃「……知らない殿方に嫁いで、あんなことするのは嫌だわ」
とき「知らないなら知ってみればいいじゃないですか」

悠乃、びっくりして、

悠乃「えっ？ときは……大人みたいね」

とき「会ってみて嫌な人なら旦那さまも無理じいはしないでしょう。また別の資産家のご子息を探すだけです」

悠乃「……考えたこともなかったわ」

とき「以前のお嬢さまなら、好奇心いっぱい知らない人と会うのも楽しんでたと思いますよ」

悠乃「そうかな」

とき「そうですね。あの車掌に惚れてからのお嬢さまはなんだからナヨナヨして。自分の道は自分で決めるお嬢さまの方がずっとかっこよかったです」

悠乃、自信に満ちた表情になり、

悠乃「とき」

とき「はい」

悠乃「ありがとう」

とき「帰りましょうか。旦那さまも心配してますよ」

悠乃ととき、並んで歩き出す。

○神崎呉服店・店内

神崎の前で正座している悠乃。

神崎「女学校に真面目に通うなら、嫁ぐのは卒業後でもいい。二度と洋画なんか描くんじゃない。いいな」

悠乃「……はい」

悠乃、神妙な面持ち。

○女学校・教室

教室内には悠乃、絹代を含む女学生がいる。

休み時間で女学生たちは談笑したり、思い思いに過ごしている。

窓際の前後の席にいる悠乃と絹代。

絹代、悠乃に話しかけている。

絹代「またお見合いすることにしたの。前の人より資産は落ちるけど男前なの。異国のスタアみたい」

悠乃、心ここにあらずの様子。

絹代「悠乃ちゃん、どうしたの？」

悠乃「……あ、ごめん」

絹代「毎日学校に来るようになったのは嬉しいけど……元氣な

いね」

絹代、窓の外を見て、

絹代「女の人が校門にいるよ。あの人、悠乃ちゃんの知り合いでしょ」

悠乃が外を見ると和歌子がいる。

悠乃「え、和歌子さん」

聞いていた女学生Aも窓の外を覗く。

女学生A、意地悪そうな口調で、聞こえよがしに悠乃に言う。

女学生A「あーあの女、カフェーの女給でしょ。男にだらしないって言われてる」

悠乃「和歌子さんはそんな人じゃない」

教室を出ていく悠乃。

○女学校・校門前

和歌子が立っている。

悠乃が走ってくる。

悠乃「和歌子さん」

和歌子、悠乃に気づく。

手を取り合う悠乃と和歌子。

和歌子「悠乃ちゃん、久しぶり。カフェーに来なくなっちゃったし、ここなら会えるかなって」

悠乃「何かあったんですか？」

和歌子「私、田舎に帰ることにしたの」

悠乃「どうして？木暮さんとは……」

和歌子、一瞬言葉に詰まり、

和歌子「……悠乃ちゃんにも気づかれてたのね。私、ほんと迷惑ばかり」

悠乃「和歌子さんに迷惑してる人なんていません」

和歌子「私ね、『男にだらしない』って噂を立てられちゃったの。それを真に受ける人も多くて……」

悠乃「和歌子さんはそんな人じゃないです」

和歌子「ありがとう。信じてくれて。でもカフェーの同僚たちにそう広められちゃって。こんな私、木暮さんにふさわしくない」

悠乃「そんな……根も葉もないんでしょう。木暮さんの気持ち

はどうなるんですか」

和歌子「……もう決めたの」

和歌子、悠乃に包みを渡す。

悠乃、包みを受け取って広げる。

洋風の前掛けが入っていた。

和歌子と同じデザインで色違い。

悠乃、前掛けを広げて身体にあてる。

悠乃「これ、和歌子さんと同じ。ふわふわの……洋風の前掛け

……素敵」

和歌子「ほめてくれて本当によれしかったから、悠乃ちゃんに似合うようにお揃いのを作ったの」

悠乃「ありがとうございます。嬉しい」

悠乃、涙ぐむ。

和歌子「悠乃ちゃん、仲良くしてくれてありがとうございます。元気で幸せになってね」

悠乃「……木暮さんには会ったの？」

和歌子「会うと……決心鈍りそうだから。悠乃ちゃん、ありがとう。元気でね」

沈んだ表情の悠乃。

○黒川洋画塾・玄関

自転車で悠乃がやってくる。

悠乃、自転車を止めて中に入っていく。

○同・アトリエ

画塾生たちが絵を描いている。

指導している黒川。

刻を知らせる鐘が鳴る。

黒川「今日はここまで」

画塾生たち、画材を片付けている。

室内に入ってくる悠乃。

悠乃を見て驚く黒川。

黒川「……神崎くん」

悠乃「すみません。退塾したのに」

黒川「何かあったんですか？」

悠乃「……無理なお願いですが、今晚だけこの部屋と画材を貸していただけないでしょうか」

黒川「それは……」

悠乃「画材を父に全部捨てられてしまっただけです。どうしても今晚中に描きたい最後の絵があるんです」

聞いていた画塾生たち、顔を見合わせてうなずく。

画塾生たち、各々が悠乃に画材を差し出す。

画塾生A「画材は……僕たちのを使ってください」

画塾生B「黒川先生、僕たちからもお願いします」

黒川「……いいでしょう。戸締まりは、ちゃんとしてくださいね」

立ち去る黒川。

悠乃、黒川の後ろ姿に深く頭を下げる。

○同・同(夜)

悠乃、一人しかないアトリエ。

時計の音が響く。

一心不乱に下絵を描いている悠乃。

悠乃「朝までに間に合うかな」

悠乃、手を止めて描いた絵を見つめる。

輪郭が取られた絵は、男女が仲睦まじく並んでいる。

黒川が入ってくる。

悠乃「……黒川先生」

黒川「塾生たちから事情は聞きました」

悠乃「……まだ下絵ですが」

黒川、悠乃の描きかけの絵を見て、

黒川「いい構図ですね」

悠乃「ありがとうございます」

黒川、一瞬言い淀んで、

黒川「しかし、この絵を完成させずに、そのまま黙っていれば、

想いを寄せる車掌と添い遂げられるかもしれませんよ」

悠乃、うつむいている。

黒川「恋敵はいなくなるんでしょう。今は片恋でも、成就の可

能性は格段に上がります。時間の問題でしょう」

悠乃、少し笑って、

悠乃「驚きました。黒川先生が恋の達人のようなことをおっしゃ

るなんて」

黒川、無然として、

黒川「……極めて論理的に可能性を述べたまでです」

悠乃「恋敵はいなくなる……それも頭をよぎらなかつたと言え

ば嘘になります」

黒川「その男と一緒にあって、親元を離れば、絵も続けられます」

悠乃、首を振って、

悠乃「それは誰も幸せにならないと思います。木暮さんも和

歌子さんも、両親も……そして何より私自身もです」

黒川「神崎くん、君には洋画の才能がある。非常にもつたいないですが……」

悠乃、黒川に向き直り、

悠乃「黒川先生、私的なことをお伺いしてもよろしいでしょうか」

黒川「どうぞ。腹を割って話す機会はもうないでしょうし」

悠乃「黒川先生はご結婚されていますか？」

黒川「皆、私を独り者と決めつけて誰も聞きませんが……妻が

おります。もうすぐ子供も生まれます」

悠乃「よかつた……安心しました。私も黒川先生はつきり……いえ、何でもありません」

黒川「堅物に思われるのは、慣れますから気にしてませんよ」

悠乃、首をすくめる。

悠乃「黒川先生の奥方はどんな方なのでしょう」

黒川、照れたように、

黒川「……私より少し年上で職業婦人ですよ」

悠乃「まあ……素敵ですね。どんなお仕事をされているんですか」

黒川「広告の図案家です。ハート化粧品ってご存じですか」

悠乃「はい。ハート化粧品は女学校でも人気です。私は親が許してくれないので持っていないませんが、親友の絹ちゃんにクリームを使わせてもらいました」

黒川「ハート化粧品の広告は細君の図案です」

悠乃「すごい」

黒川「細君は私にこう言ってくれたんです。あなたは好きな絵を描いて。稼ぐ絵は私に任せてね、って」

悠乃、真剣にうなずいている。

黒川「今も大きいお腹で新製品の図案を描いています」

悠乃「夫婦って、いろんな形があるんですね」

黒川「うちは変わっていると思います」

悠乃「母が薦める『嫁ぐ』という道は、人から受け入れられやすいと思います」

黒川「そうかもしれないですね。でも確実な人生なんてないですよ」

悠乃「いつの世も、女性の幸せって一種類でまとめられてしまっているのか。百年、二百年先も」

黒川「いつの世もいろんな人間がいるのでしようが、まとめたくなるのが性でしょうね。百年先も二百年先も」

悠乃「そして、王道の人生を歩むと、つまらない、平凡、型にはまってしまうと揶揄されたり、悩んだりするのでしょうね」

黒川「神崎くんはどうしますか？」

悠乃「私は親の決めた縁談をお受けします」

黒川「そうですね」

悠乃「私を見る人は、親の言いなりで無難な人生を選んだと思うでしょう。でも私、誰の言いなりでもない。自分の意志で選びました」

黒川「せめて……絵を描くのは続けませんか」

悠乃、首を振って、

悠乃「いえ、今日限り絵筆は持ちません」

黒川「なぜですか」

悠乃「絵には……想い出が多すぎて耐えられないからです。きっと決別します。絵と決別して、それから……」

悠乃、床に目を落とすと、絵に描かれた男性の輪郭が視界に入る。

スケッチの解像度が高くなり、木暮の顔になっていく。

悠乃、目を逸らす。

黒川、悠乃の様子を察して、

黒川「最後の絵、悔いのないように仕上げてください」

悠乃「はい。黒川先生と塾生の皆さんのこと忘れません。ありがとうございました」

黒川、アトリエを出ていく。
扉が閉まる。

悠乃、深く頭を下げている。

○同・同（朝）

窓から朝の光が差し込む。

鳥のさえずりが聞こえる。

完成した絵の傍で眠っている悠乃。

あかりM「祖母は黒川先生と語り合った後、徹夜で渾身の絵を描き上げました。その絵を持って向かったのは……」

○並木道（朝）

自転車走り抜ける悠乃。

丸めた絵を脇にはさんでいる。

○交通局・事務室（朝）

木暮と数人の職員がいる。

室内に入ってくる悠乃。

悠乃、木暮に駆け寄り、

悠乃「木暮さん」

木暮「悠乃さん、どうしたんですか？」

悠乃「和歌子さん、今日の汽車で田舎に帰っちゃうんです」

木暮、一瞬驚くと、諦めたように、

木暮「……僕は和歌子さんに振られたんだよ。今更、迷惑だから」

悠乃「それは和歌子さんの本心じゃありません」

木暮「どうして……」

悠乃「そんなこともわからないんですか。和歌子さんは、木暮

さんが好きなのに。根も葉もない噂のせいで、木暮さんには

ふさわしくないから……」

悠乃、持っていた絵を広げて、木暮に見せる。

ハイカラな市電の前で仲良く佇む車掌姿の木暮と前掛け

をした和歌子の絵。

背景には、木暮の故郷の山が描かれている。

悠乃「この絵を持って、和歌子さんを追いかけてください」

木暮「これ……悠乃さんが……」

悠乃「はい。私の好きな二人が、好きな人の好きな人だから、

幸せを逃さないでください」

木暮、絵を受け取って、

木暮「悠乃さん、ありがとう」

木暮、部屋を出ていく。

悠乃、閉まる扉を見つめて涙を流す。

市電の職員たちが、悠乃を元気づける様子。

あかりM「祖母は、それから一度も絵筆を持たず、女学校を卒

業すると親の決めた相手に嫁ぎました。曾祖母の言った通り、

祖母は資産家の夫に大切にされて、長い年月の後、末孫の私
が誕生しました」

○同・室内

悠乃（91）が荷物を整理している。

古い前掛けや写生帳など、想い出の品を手にとって、感
慨に浸りながら片付けている。

テレビのニュース番組が流れている。

写生帳をバラバラとめくる悠乃。

悠乃、懐かしそうな表情。

扉が開いてあかりが入ってくる。

悠乃「あかり、いらっしやい。すいか切ろうか」

よろけながら立ち上がる悠乃。

あかり、慌てて悠乃を座らせて、

あかり「おばあちゃん、じつとして。もう九十過ぎてるんだ

から座ってよ」

あかり、涙ぐんでいる。

悠乃「あかり、泣いてるじゃない。どうしたの？何かあったの？」

あかり。けたたましく話し出す。

あかり「もう。おばあちゃん、聞いてよ。パパもママも全然話

通じない。おばあちゃんしかわかってくれない」

悠乃「あらあら、どうしたの？」

テレビのニュースの話題が変わる。

テレビ画面のアナウンサー「函館市制七十周年記念事業として、

当時の車体を復元した市電『箱館ハイカラ號』が市民の足と

○ラジオ局・収録スタジオ内

ラジオ番組のジングルが流れる。

収録ブース内でマイクに向かって話しているあかり。

あかり「祖母の話は以上です。後日談として、平成五年、私が
高校生の時に九十を過ぎた祖母と復刻したハイカラ號に乗っ
た時の話もさせてください」

○高杉家・外観

T…『平成五年』

夏、セミが鳴いている。

広い庭のある戸建て。

庭の離れに平屋の家がある。

あかり（17）が母屋の玄関を出て、離れの平屋に歩いて
いく。

○離れ・玄関

あかり、玄関扉を開けて大声で叫ぶ。

あかり「おばあちゃん、入るよ」

して復活しました」

悠乃、ニュースに聞き入っている。

あかり「へえー、レンガ色でおしゃれな市電。洋館みたい。こんな市電走ってるんだ」

悠乃「おばあちゃん、あかりに一つだけお願いしようかな」

あかり「うん。おばあちゃんの頼みなら何でも聞くよ」

悠乃「おばあちゃんね、あの市電に乗りたい」

あかり「え？今のニュースの市電？さすがに心配だよ。暑いし

混んでそうだし、おばあちゃんの体力が……」

悠乃「あの市電にはね、おばあちゃんの大切な想い出があるんだよ」

あかり「おばあちゃん、そんなに電車好きだったけ？」

悠乃「あかりにだけ話そうかな。昔、昔のおばあちゃんの市電

の想い出……」

あかり「わー、聞きたい聞きたい」

あかり、悠乃の話をワクワクして待つ様子。

あかり、悠乃の話をワクワクして待つ様子。

○函館市電の停留所

並んで市電を待っている杖をついた悠乃とあかり。

あかり、悠乃の身体をしっかりと支えている。

通行人が悠乃にベンチを譲ってくれる。

あかり、通行人に頭を下げて、悠乃をベンチに座らせる。

あかりM「祖母の娘時代の話を聞いた私は、九十過ぎの祖母と一緒に復元されたハイカラ號に乗りました」

○走る市電の中

車内の座席に並んで座る悠乃とあかり。

あかり、楽しそうにはしゃいでいる。

あかり「ほんとだ。おばあちゃんの言う通り、市電に乗っちゃ

うと外の車体は全然見えないよね」

悠乃「そうでしょ……そういうえば、あかりの相談って、何だったの？」

あかり「……おばあちゃんの話聞いちゃったら、なんか贅沢すぎって言えない」

悠乃「気にしないで。時代が違うんだからね」

あかり「進路のことんだけど……パパとママは付属の女子大

にエスカレーターで行って、パパのコネで就職しろって。パ

ブルはじけて就職難だから、それが私のためって言うの」

悠乃「あかりは、パパとママが勧める進路はあんまり気が進ま

ないのね」

あかり「私ね……夢があるの」

悠乃「あかりの夢はなあに」

あかり「私、声の仕事がしたい。声優の学校に行きたいの」

悠乃、あかりの頭を撫でて、

悠乃、あかりの頭を撫でて、

悠乃「悩んで悩んで……あかりが自分で決めなさい。後悔しないようにね」

あかり「うん。そうする」

あかり、晴れ晴れした表情で、

あかり「やつぱりおばあちゃんはわかってくれるね。でもおばあちゃんが絵を描いてたなんて全然知らなかった」

悠乃「今、あかりに初めて話したからね」

あかり「先生から展覧会に推薦されるほど上手だったのに。もっといいよね」

あかり、ふと車窓を見る。

驚いて悠乃の肩を叩きながら、

あかり「おばあちゃん、おばあちゃん」

悠乃「どうしたの？」

あかり、車窓の風景を指す。

木暮の故郷だった山の風景。

あかり「あの山じゃない？木暮さんの故郷の……」

悠乃、感動で震えている。

悠乃「そう……そうね。変わってない。昨日のことみたい」

悠乃、幸せそうに山の風景をいつまでも眺めている。

あかり「おばあちゃんの絵見たかったな」

悠乃、返事をしない。

あかり「……おばあちゃん？ おばあちゃん」

悠乃、返事をしない。

セミの声。

市電が線路を走る音。

あかり、悠乃にすがりつく。

○ラジオ局・収録スタジオ内

収録ブース内でマイクに向かって話しているあかり
(48)。

あかり「もし祖母との最後の会話がなかったら、声の仕事に飛

び込むこともなく、私は皆さんの前にいなかったかもしれない

せん」

ブースの外であかりに合図するディレクター。

あかり、ディレクターにうなづく。

あかり「今日は私の想い出話にお付き合いくださって、ありが

とうございます。函館レディオウエーブ『サタデイカーニバ

ル』の高杉あかりでした。それではまた来週」

ラジオ番組のジングルが流れる。

ディレクター、オーバーアクションで、

ディレクター「はい、OK」

あかり、ほっとした様子でヘッドセットを外しながら、

あかり「お疲れさまでした」

若いスタッフがあかりに声をかける。

スタッフ「あかりさん」

あかり「どした？」

スタッフ「リスナーさんが喫茶室で待っています。今日の番組を聴いてあかりさんに見せたいものがあるって」

あかり、不思議そうに、

あかり「年配の方？」

スタッフ「いえ、アラサーくらいの女性です」

あかりとスタッフ、スタジオを出る。

○同・喫茶室

ラジオ局内の喫茶室。

客は少なく閑散としている。

あかりの向かいには木暮茉奈（31）が座っている。

茉奈「私、木暮茉奈って言います」

あかり「木暮さんって。もしかして……」

茉奈「はい、木暮伸一のお孫です」

あかり、驚いて声が出ない。

茉奈「友達があかりさんのファンで、ラジオを聴いていて、うちのことじゃないかって連絡をもらいました」

あかり「祖母から聞いてはいたけれど……ほんとにいたんですね。木暮さん」

茉奈、古い巻き紙を差し出す。

あかり、緊張の面持ち。

茉奈が巻き紙を広げる。

ハイカラな市電の前で仲良く佇む車掌と女給。背景には山が描かれた絵。

あかり「この絵は……」

茉奈「あかりさんがラジオでお話していたおばあさまの絵に間違いと思います」

茉奈が絵の隅のサインを指す。

かすれた文字だが、かすかに『神崎悠乃』と読める。

あかり、サインを指でなぞって、

あかり「神崎悠乃……おばあちゃん」

あかり、涙ぐむ。

茉奈「曾祖父は私が生まれる前に亡くなっていましたが、和歌子ばあば……曾祖母のことは幼い頃に記憶があるんです」

あかり「じゃあ、木暮さん、和歌子さん……よかった」

茉奈「和歌子ばあばは、この絵を『お友達が描いてくれた大切な宝物だよ』って小さな私に言っていたんです」

あかり「茉奈さん、ありがとうございます。今日来てくださって。本当にありがとうございます」

あかり、茉奈と手を握り合う。

○走る市電の車内(夕)

人がまばらな車内。

あかりが乗っている。

車窓を眺めると山に夕陽が沈む情景。

あかりの前に幻のような女学生姿の悠乃(16)と車掌の

木暮(22)が現れる。

目をこするあかり。

悠乃と木暮は寄り添って仲睦まじく、車窓の山の風景を
見ている。

あかりM「祖母の最後の絵は、百年の時を超えて私の目の前で
生きている」

目を閉じるあかり。

路面を走る市電の音が聴こえる。

△了▽

第31回函館港イルミネーション映画祭2025

第29回シナリオ大賞 函館市長賞[グランプリ]受賞作品

箱館ハイカラクロッキー

作:今井 美香

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2026年2月20日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号(函館市地域交流まちづくりセンター内)

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：いーハコダテ事務局

〒042-0942 北海道函館市柏木町31-15-207

TEL 0138-52-3727 <https://www.ehako.com/>
